

日本思想史の新しい可能性

ウィリアム・ステイール

思想史とは何なのでしょう。思想史の研究は、近年、どのような変化がみられるのでしょうか。今年
年の思想史は十年前、二十年前のそれとは違うのでしょうか。われわれ思想史を専門としている者は
常にこのような問いを発せざるをえません。

本日のシンポジウムのテーマは「思想史の中のライフサイクル——思想史と社会史の接点——」で
す。思想史と社会史とを比較することによって、もっとはつきりとした思想史の定義ができるのでは
ないでしょうか。他の学問領域における学問的成果や研究方法を学ぶことによって、思想史の中身と
方法を再検討し、思想史という学問をより豊かなものにしていかなければなりません。

思想史はいわゆるごく少数の選ばれた偉大な思想家の体系的な思想を考察の対象とするだけなので
しょうか。あるいは国家権力を握って中央で活動する支配者に影響を及ぼした思想を研究の対象とす
るのでしょうか。あるいはまた思想史は国の近代化の知的源泉をさぐることにあるのでしょうか。合
理と非合理、普遍と個別、正統と異端、中央と地方、——思想史はどこに重点をおいたらよいのでし
ょうか。思想史とは人間の創造的な考えについての研究ですが、それらを抽象化された観念それ自体

の構造において評価すべきなものでしょうか。あるいはそれらを社会の中で動態的に捉えて評価すべきなんでしょうか。たびたびこのように問うた方がよいのではないのでしょうか。思想史とはなにか、と。最近の思想史研究にはかなり新しい傾向がみえてきました。新しい思想史が誕生しているのかもしれない。つまり、思想史の研究においては、もちろん荻生徂徠のような著名な思想家の偉大な思想についても学んできましたが、地方の思想家、無名の思想家、権力と関係のない思想、日々の生活への思想に対する関心も増大してきました。また、いわゆる近代化の枠組みや目的論的な枠組みにとられない、自由な発想への傾向がみえてきました。合理的思想よりは神話と神秘的発想、遊びの思想や食べ物の思想等々、最近の思想史は高度に抽象化された体系的な思想よりは日々の生活に根ざした心性や気分を配るようになってきました。また思想と実践とのダイナミックな関係に注意を払うようになってきました。

この立場から見ると、思想史は単なる観念 (idea) の歴史ではなく、むしろいわゆる言説 (discourse) の歴史であるといえましょう。つまり、思想とそのまわりを取り巻く広い世界の関係性の歴史なのです。だからこそ、今年のシンポジウムのテーマの副題に「思想史と社会史の接点」という題を掲げました。

ヘルマン・オームス氏が去年新しい本を出版しました。Tokugawa Village Practice: Class, Status, Power, Law. (California University Press, 1996) です。オームス氏の前の本、『徳川イデオロギー』(邦訳ペリカン社、一九九〇年) はよく知られていると思いますが、オームス氏は Tokugawa Village Practice の序文で自問しています。「思想史から社会史へ、現実の表象から現実そのものへという重点の移動がなぜ私に起こったのか」と。オームス氏は思想史を放棄したのでしょうか。そうではありません。彼は新しい本においてもっとはっきりしたかたちで、思想あるいは表象と現実の動き (Practice) との関係性を強調したいのです。オームスはフランスの社会学者ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の方法論を高く評価しています。ブルデューによりますと、思想は現実の動きにリンクするからこそ意

義があるのです。また逆に、ある現実の制度というものも、思想的な背景を無視して、それ自体として客観的に見たところで、それは無意味なのです。

近年の最も刺激的な研究のいくつかは、思想史と社会史とがダイナミックにリンクした、まさにそのところから生まれてきています。そして社会史の研究の進展には目覚ましいものがあります。多くの研究が日夜生み出されつつありますが、思想史の専門家には、これらの研究をどうみるべきでしょうか。社会史における新たな知見を、どのようにして自らの研究に組み入れていくべきなのでしょう。そして、思想史の研究者が社会史の研究者に送るべきメッセージはあるのでしょうか。こうした問いかけこそが、まさに、思想史と社会史の接点をさぐるという今年のシンポジウムのテーマの問うているところなのです。すなわち新しい思考の枠組みを模索し、ひいては新・思想史を想い描くことさえも問うているのです。

今日は、網野善彦先生に宗教と経済の関係について報告していただきます。これは、思想とその実践との関係、つまり思想史と社会史との関係の在り方を考察するのに最適の題材です。そして、思想史と社会史の接点という視点からのケーススタディーとしてライフサイクルの問題を大きく主題として取り上げました。エリック・エリクソンが『アイデンティティとライフサイクル』において次のように述べています。「歴史に従事するものが無視し続けてきた単純な事実がある。それは、すべての人間は母親から生まれ、みな一度は子どもだったことがあるのであり、人々、そして諸国民は子ども部屋で人生の第一歩を踏み出すのであり、そして社会は子どもから大人への発達過程にある個々人によって成り立っているのだ、ということである」。

エリクソンは精神分析学を通してライフサイクルの研究に取り組みました。私たちは、今日、思想史を通してこの問題に取り組むのです。誕生、成長と老い、病氣、そして死、こうしたそれぞれの生涯の階段についての思想の歴史に着目し、ひいては私たちの人生の意味を考えたいのです。これは、明らかに新・思想史に属する仕事です。私たちは、研究領域の対象に新しい「思想家」たちを喜んで

迎え入れるでしょう。すなわち、子ども、母親、父親、若者に老人、そして病気の者に健康な者を。私たちは、新たな知的可能性の広く拓かれた時代にあります。新・思想史は、今まで当然のものとして見過ごされてきた様々なものに、新たな光を当てていくこととなるでしょう。忘れ去られたもの、非合理的なもの、取るにたらないもの、抑圧されたもの、境界線上にあるもの、伝統的なもの、常軌を逸したものの、昇華されたもの、支配されたもの、拒絶されたもの、本質的でないもの、辺境のもの、周縁のもの、排除されたもの、存在感のないもの、沈黙させられたもの、偶然的なもの、四散させられたもの、権利を奪われたもの、先送りされたもの、解体されたもの。なされるべきことは沢山あります。そしてここには多大な可能性が秘められているのです。

ライフサイクルという今回のテーマになぞらえて言うならば、思想史研究は、今、青年期あるいは青春期を迎えた段階にあるのだ、といえましょう。

(国際基督教大学教授)